

想起説は「メノンのパラドクス」への応答か

—『メノン』におけるプラトンの教育思想—

Does the Theory of Recollection respond to “Meno’s Paradox” ?

— Plato’s Thoughts on Education in *Meno* —

次世代教育学部こども発達学科

酒井健太郎

SAKAI, Kentaro

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

Abstract : This paper aims to clarify Plato’s thoughts on education in *Meno*. In this dialogue, Meno asks Socrates whether virtue is teachable. Socrates answers that he does not know whether virtue is teachable and goes on to ask, in turn, how to define virtue. Meno presents three definitions of virtue, each of which are refuted by Socrates. Meno grows weary of their conversation and presents Meno’s paradox – that if one knows what one is seeking, inquiry is unnecessary, but if one does not know what one is looking for, inquiry is impossible. Therefore, Meno argues that inquiry is either unnecessary or impossible. He does this to cease his discussion of virtue with Socrates. However, Socrates perceives Meno’s intention and responds by presenting the “theory of recollection” – that learning essentially consists of remembering things we knew before we were born but then forgot – to argue that inquiry should persist.

Most scholars take the theory of recollection to be Plato’s response to Meno’s paradox. Recently, however, Dominic Scott objected this interpretation by introducing the distinction between “Meno’s challenge” (80d5-8) and the dialogue’s “eristic dilemma” (80e1-5). In other words, Scott claims that Plato’s theory of recollection is not intended as a response to Meno’s paradox. By pointing out several problems with Scott’s interpretation, I claim that discovery depends on the possibility of inquiry and therefore that the theory of recollection is both intended to solve and indeed solves Meno’s paradox.

Keywords : Plato, theory of recollection, learning, inquiry, discovery

if the *Phaedon* and the *Gorgias* are noble statues,
the *Menon* is a gem.
———J. S. Mill¹⁾

はじめに

プラトンの『メノン』は、古くはジョン・スチュアート・ミルによって「宝石」と讃えられた珠玉の対話篇である。宝石は、それを見る角度によって異なった輝きを示すだろう。『メノン』についても、われわれはそこから様々な哲学的問題や洞察を引き出すことができる。本稿では、その中でも特に、いわゆる「メ

ノンのパラドクス」と想起説の関係に焦点を当てることで、『メノン』におけるプラトンの教育思想を明確化することを目指す。

「メノンのパラドクス」あるいは「探究のパラドクス」は、現代の教育哲学の文献においても、論じるべき重要な問題として認められている²⁾。他方、すぐ後に見るように、このパラドクスの内実と意義については先行研究の見解が完全に一致しているわけではない。それゆえ、この問題を考察することは、哲学史研究のみならず、教育哲学、あるいはより広く教育学一般にとっても意義のあることだろう。

本稿の構成は以下になる。第1節では、『メ

ノン』前半部の内容を概観することで、有名な「想起説」が提出されるまでの文脈を示す。第2節では、いわゆる「メノンのパラドクス」に関わるテキストを確認したうえで、「想起説はメノンのパラドクスへの応答を示していない」とするScottによる新解釈を参照する。第3節では、Scottの解釈に反論を加えることで本稿の解釈を提出する。

1. 『メノン』前半部内容概観

『メノン』は、テッサリア出身の若者メノンとソクラテスの対話そのほとんどを占める。この対話編は他のものと異なり導入部を持たず、メノンによるソクラテスへの「徳は教えられることができるか (*ἀρα διδασκτὸν ἢ ἀρετή*;)」(70a1-2)³⁾という問いかけから始まる。メノンはソクラテスがこの問題への解答をすぐに教えてくれるという期待を持っているが、ソクラテスは徳の教授可能性どころか、徳の「何であるか」さえ知らないと答える。後者を知らなければ前者を知ることできない。この事態が、「メノンが誰かを知らなければ彼がどのような性質を持った人間であるか分からない」という印象深い例で示される。他方、メノンは自身がゴルギアスから徳の「何であるか」を聞いたことをほのめかし、ソクラテスに促されることで、その内実を示すことになる。

メノンは徳の「何であるか」について以下の3パターンを挙げる。

- (A) 男の徳は「国事を処理する能力」等々であり、女の徳は「所帯をよく保ち夫に服従すること」等々 (71e1-72a5)
- (B) 人々を不正にではなく正しく支配する能力を持つこと (73c9-d10)
- (C) 「立派なものを欲求してこれを獲得する能力があること」(77b4-5)

上記のいずれもソクラテスによる反論を受ける。(A)については、徳そのものの定義を尋ねられているにもかかわらず、様々な徳それぞれの定義を挙げている。(B)については、徳には正義以外のものも存在するので、その定義項が徳のうちの1つのみを含んでいることは奇妙である。(C)については、立派なものと善きものが同一視されたうえで、悪しきものを欲求するものは誰もいないことから、立派なもの=善きものを欲求するという点では有徳な人とそうでない人に違

いは生まれぬ。それゆえ、定義項後半部の「獲得する能力」こそ有徳か否かの指標となるが、これが「正しくかつ敬虔に」という条件を付け加えなければならぬものであるとすると、(B)とほとんど同じく、徳の全体をその部分によって定義してしまうという誤りを犯すことになる。

メノンは上記の反論を受け、困り果てた結果として、ソクラテスを近づいて触れるものを誰でもしびれさせるシビレエイに喩える。自身もソクラテスによってしびれさせられてしまったので、徳の「何であるか」について答えることができなくなったというのである。ソクラテスは仮に自身がシビレエイだったとしても、徳の「何であるか」をメノンと共に探究する(*συζητήσαι*)つもりであると宣言するが、ここでメノンから、いわゆる「メノンのパラドクス」が提示される。すなわち、「何であるか」をまったく知らないものであれば探究できず、「何であるか」を知っていれば探究の必要はないので、いずれにせよ探究は不可能である。

メノンのこのような反応を受け、ソクラテスは「人から聞いた話」として、人間の魂は不死であるがゆえにこの世のものとあの世のものをすべて見てきているから、それらを何らかのきっかけで想起することができる」と主張する。「探究と学習は実は全体として想起である (*τὸ ... ζητεῖν ἄρα καὶ τὸ μαθάνειν ἀνάμνησις ὅλον ἐστίν*)」(81d4-5)。これが、おそらく『メノン』篇の中で最も有名な「想起説」である。ソクラテスは、このような想起説は真実であるから、探究の可能性を自ら閉ざしてはならないとメノンに諭す。

ソクラテスの提示する想起説について半信半疑のメノンは、その実例を提示するようソクラテスにせがむ。ソクラテスはギリシア語を話すことができるが幾何学について学んだことのないメノンの召使いに、8平方プースの正方形の1辺の長さが何プースであるかを尋ねる⁴⁾。最初は4プースという誤った答えを出していた召使いは、ソクラテスとの対話を経て、4平方プースの正方形の対角線こそが1辺の長さであるという正しい答えを提出することになる。ソクラテスによれば、彼は召使いに何も教えていない。召使いは自分の中の「思いなし (*δόξα*)」を取り出していくことで正しい答えにたどり着いたというのである。召使いはこれまで一度も幾何学について学んだことがなかったのであるから、生まれる前にそのような答えを知っていたとしか考えられない。ソクラテスは想起をこのように実演してみせる。

ソクラテスとメノンの2人は、その後、徳の「何であるか」をあらためて探究し直していくことになる。

2. 想起説はメノンのパラドクスへの応答ではない——Scottによる新解釈

前節では、想起説が提出されるまでの『メノン』前半部の議論を概観した。本節では、対話の中で想起説が提出される原因となった、いわゆる「メノンのパラドクス」に関わるテキストを参照したうえで、その箇所に関するScottの新解釈を示す。

先述のように、ソクラテスをシビレエイに喩えた後に、メノンは次のように述べる。

メノン：おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかをまったく (*τὸ παράπαν*) 知らないものをいかなる仕方で探究するつもりですか。というのも、知らないものの中のいかなるものを、目標として立てたうえで探究しようというのでしょうか。そして (*ἦ*)⁵⁾、実際にたまたまそれに出くわしたとしても、それが知らなかったものであるということがどうしてわかるのでしょうか。(80d5-8)

そして、ソクラテスは以上のメノンの問いを受けたうえで、それをパラフレーズする。

ソクラテス：メノン、君がどんなことを言いたいかわかったよ。君がどれほど争論家の好む議論を持ち出しているかに気づいているかね。それはこのようなものだ。すなわち、人間は、知っているものも知らないものも探究することはできない。知っているものを探究することはないだろう——なぜなら、知っているのであれば、そのような人には探究する必要はないからである。そして、知らないものを探究することもない——なぜなら、何を探究するべきかを知らないからである。(80e1-5)

これら2つのテキストの示す内容が、通常、「メノンのパラドクス」と呼ばれるものである。

さて、最近の研究において、このメノンのパラドクスについての注目すべき解釈を提出したのがScottである。彼の解釈の特徴は、メノンのパラドクスと想起説の関係に関わる。想起説はメノンのパラドクスに反論し探究可能性を確保するために提出されたという解釈が一般的であるが、Scottはこの解釈に反対する。

まずScottは、パラドクスの背後に潜む問題に注意を促したうえで、先の2つのテキストのうち、前者(80d5-8)を「メノンの挑戦 (Meno's challenge)」, 後者(80e1-5)を「争論的ジレンマ (eristic dilemma)」と名付ける。なぜなら、「メノンのパラドクス」という呼称は、この両者の内実の区別を曖昧にしてしまうからである⁶⁾。

さて、Scottはこの「メノンの挑戦」と「争論的ジレンマ」について、前者については80d5-8のテキストを(M¹)と(M²)に区別し、後者については80e1-5を(S¹) - (S⁴)にパラフレーズする⁷⁾。

「メノンの挑戦」(80d5-8)

(M¹) おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかをまったく (*τὸ παράπαν*) 知らないものをいかなる仕方で探究するつもりですか。というのも、知らないものの中のいかなるものを、目標として立てたうえで探究しようというのでしょうか。

(M²) あるいは (*ἦ*)⁸⁾、実際にたまたまそれに出くわしたとしても、それが知らなかったものであるということがどうしてわかるのでしょうか。

「争論的ジレンマ」(80e1-5)

(S¹) すでにその対象を知っているなら、それを真真正正な仕方で探究することはできない。

(S²) それを知らなければ、探究することはできない。なぜなら探究しようとするものを知りさえしないから。

[暗黙の前提 (S³) 或るものを知るか知らないかのいずれかである。]

(S⁴) それゆえ、いかなる対象も探究することはできない。

Scottはこれらについて次のような説明を加える。

(M¹) では探究対象について「完全に白紙 (total blank)」の認知状態を示す「まったく (*τὸ παράπαν*)」という言葉とともに探究の始まりに関する問題が示され、(M²) では探究を完了させることに関する問題が述べられている。他方、このうちの(M²)が姿を消した(S¹) - (S⁴)においては、(メノンの挑戦とは異なり)すべての探究可能性を排除する(S⁴)が、ソクラテスによって付け加えられた(S¹)と(M¹)に対応する(S²)、そして暗黙の前提である(S³)から導出される。Scottによれば、メノンの挑戦から争論的ジレンマへの移行の際にソクラテスが(M²)を排除

したのは、メノンの本当の関心が (M²) よりも (M¹) にあることを見抜いていたからである。それゆえ、さしあたりは (M¹) とそれが関連する (S¹) - (S⁴)、すなわち争論的ジレンマが議論の中心にあるとScottは考えている⁹⁾。

さて、以上の準備を経て、Scottは想起説が争論的ジレンマに応答できるかどうかを探る。結論を先取りすれば、彼はそれに「否」と答える。ここでScottが着目するのが、争論的ジレンマにおける (S¹) と (S²) である。これらが示すのは、対象について完全に知っているかまったく知らないかという二者択一が迫られ、いずれの場合でも探究は不要ないし不可能になる、という事態である。すなわち、探究が必要ないし可能であるためには、探究対象を何らかの仕方ですべて特定したうえで、かつ、探究の余地が残されるほどには対象について知らない状態になければならない。多くの解釈者たちがこの事態を解消するために想起説を持ち出されたと主張する一方、そこには想起説とは異なる抜け道がある、と解するのがScottの方向性である¹⁰⁾。

ともあれ、Scottによれば想起説は争論的ジレンマへの回答にならない。ここで彼が挙げるのは、(1) 哲学的理由、(2) 「ソクラテスとメノンの関係の力学」、そして(3) ソクラテス自身の発言との齟齬という3つの論拠である¹¹⁾。

(1) 哲学的理由：ソクラテスは『メノン』篇において後に、知識と真なる思いなしの区別を行う (97c9-98b5)。Scottによれば、この真なる思いなし=部分的把握によって、知識=完全な認識を持たずとも探究を行う可能性が生じる。対象のすべてを知らずとも、その部分的な把握が探究の開始点となるからである。それゆえ『メノン』では、ジレンマ解消のために必要とされるものは想起説ではなく真なる思いなしである。実際に、探究の際には何らかの手段で対象について部分的に把握してさえいれば想起など不要であり、また、知識=完全な認識を対象とすることで部分的把握を排除する想起は探究を不要なものとしてしまう。真なる思いなし=部分的把握が存在するがゆえに、探究は意味を持つのである。したがって、想起説では探究可能性を担保できない。

(2) 「ソクラテスとメノンの関係の力学」：ソクラテスが着目するのはメノンの動機である。ジレンマを提示するメノンの関心は、ソクラテスとの対話から逃げ

出すことにある。想起説は、異国の神官や聖女についての話とともに、このような心情に陥ってしまったメノンを鼓舞するために用いられている。

(3) ソクラテス自身の発言との齟齬：『メノン』のうちには、彼にしてはめずらしく、ソクラテスが自身の考えを強硬に主張する箇所が存在する。

ソクラテス：ほくは、この説[想起説]の擁護のため、他の諸々のことについては、それほど確信を持って断定しようとはしない。しかし、人は知らないものを探究しなければならないと考える方が、知らないものを発見することもできなければ探究すべきでもない (*ἄ μὴ ἐπιστάμεθα μηδὲ δυνατόν εἶναι εὐρεῖν μηδὲ δεῖν ζητεῖν*) と考えるよりは、われわれはより優れた者になり、より男らしく怠けなくなるだろう、ということについては、できるかぎり、言葉のうえでも振る舞いのうえでもおおいに強く主張したいのだ。(86b6-c2)

ここでのソクラテスの発言は、80e1-5と微妙に異なっている。そこでは探究の不可能性が論じられていた一方、この86b6-c2では発見が不可能であるから探究することは不適切であると主張されている。すなわち、「彼[ソクラテス]は探究それ自体 (*inquiry per se*) というよりも、成功した探究 (*successful inquiry*) の可能性に関心を持っているのである」¹²⁾。

以上の3つの論拠から、Scottは想起説がジレンマへ応答することを意図して提出されたものではないと主張する。むしろ彼にとっては、(1) から明らかのように、ジレンマは探究対象についての部分的把握を行うことで解消されるものである。その一方、Scottによれば、想起説とは、ソクラテスによって除外された (M²) が対象とする「発見の問題」に応答するために提示されたものとなる¹³⁾。

3. 探究可能性は発見可能性に優先する——Scott解釈への反論

前節ではScottによる新解釈を参照することで、想起説がメノンのパラドクス(彼自身による区別では「争論的ジレンマ」(80e1-5))への応答ではないことの根拠が示された。本節は、このScottの解釈に反論し、想起説をパラドクスへの応答として再度位置づけ

ることを目指す。そのため、先のScottによる(1) - (3)の論拠について検討していこう。

まず(2)については、Scottの解釈はもっともであると考えられる。たしかに、若く育ちの良いメノンの目には、ソクラテスの提示する異国情緒あふれる物語は魅力的なものに映るだろう。また、召使いに対する想起説の実演以降、明らかにメノンはそれまでとは異なり探究へのやる気に満ちあふれているため、この説は実際に彼を鼓舞する機能も持っていると考えられる。ただし、メノンをモチベートすることと争論的ジレンマに答えることは矛盾しない。彼のやる気を引き出すという動機のもとで想起説が提出されたとしても、その理論が結果として、あるいはそれと同時にジレンマへの応答となっている可能性もある。それゆえ、(2)が正しいとしても、想起説からジレンマへの応答という性格を剥ぎ取る必要はない。

次に(1)については、Scottは次の可能性を見逃しているように思われる。それは、対象の部分的把握を認めながら、想起説がジレンマへの応答になっている、という可能性である。Scottは想起説がスタート地点に主に関係する理論であると考えているように思われるが¹⁴⁾、想起説はそれが行われるプロセスも同じように示すのではないだろうか¹⁵⁾。想起の実演の後、ソクラテスは次のように述べる。

ソクラテス：今は、これら様々な思いなしは、ちょうど夢のように、彼にとっては呼び覚まされたばかりだ。しかしもし誰かが、こうした同じ事柄を多くの機会に多くの仕方でも尋ねるならば、最終的には、この子はこうした事柄について、誰にも負けなくらいに精確な知識をもつようになるだろう [...] 誰かが教えたからというわけではなく、単に質問されることによって、この子は自分で自分の中から知識をふたたび取り出し、それによって知識を持つようになるのではないかね。[...] そして、自分で自分の中に知識をふたたび把握し直すということが、想起するという事柄ではないだろうか。(85c9-d7)

ソクラテスとの対話の中で、正方形の対角線についての思いなしが召使いの中に呼び覚まされた。同じ問題を様々な観点から何度も召使いに尋ね、召使いがそれに答えていくことで、思いなしを通じて精確な知識が把握されることになる。この知識の把握は誰かに教えられるものではなく自分自身の中から取り出されるも

のである。そして、知識を把握し直すことは想起であるとソクラテスは結論する。

ここでは、想起が一定の幅を持ったプロセスとして捉えられている。そのプロセスの中では、探究対象についての(真なる)思いなしが部分的に把握されている。すなわち、想起説と部分的把握は矛盾しないのである。

そして、(3)については次のように反論したい。まず、ソクラテスが(M²)を排除するのはそれについてメノンが本当は関心を持っていないからである、というScottの想定は妥当か。むしろ、(M²)を排除し(M¹)を残したのは、前者よりも後者がより根本的な問題だったからではないだろうか。なぜなら、探究をスタートしなければ発見の可能性は最初からゼロだからである。実際にソクラテスは「もし人が勇気を持ち、探究することを諦めなければ、ただ1つのことを想起することで——人々はこれを「学習」と呼んでいる——他のすべてのものを彼自らが発見することを妨げるものは何もない」(81d2-4)と述べている。ここからは、探究は発見の十分条件とは言えないが、少なくとも必要条件であることが明らかである。逆に、発見の可能性がいくら高かったとしても、探究が行われなければそれは無意味なものになってしまう。それゆえ、本稿は、ソクラテスが自身のパラフレーズの中で(M²)を排除するのは、発見可能性よりも、それが依存するものとしての探究可能性の方を重視しているからであり、「メノンの挑戦」における発見可能性を現在の文脈に無関係なものと考えているからではないと主張する¹⁶⁾。したがって、探究可能性と発見可能性を切り離し、想起説は後者にのみ適用されると解することはできない。

以上のような解釈を採用すれば、前節で引用された86b6-c2が探究の不適切性について述べており、探究の不可能性を提示する争論的ジレンマとは異なるとするScottの解釈へも反論することができる。彼は当該箇所を「知らないものを発見することはできず、したがって探究の義務もない」と読んでいる¹⁷⁾。たしかにこのように読めば、この箇所でのソクラテスの発言の力点は発見の不可能性にあり、発見することができないものについての探究は不適切である、というScottの解釈が導かれることになるだろう。しかし、この箇所のギリシア語 *ἄ μὴ ἐπιστάμεθα μὴδὲ δυνατόν εἶναι εὐρεῖν μὴδὲ δεῖν ζητεῖν* を彼のように訳すことはできない。というのも、ここの *μὴδὲ...μὴδέ* は文法的に「したがって」という意味を持っていないからである¹⁸⁾。

86b6-c2において、ソクラテスが「知らないものを探究しなければならない」と対比させているのは、「知らないものを発見することもできなければ探究すべきでもない」であり、「知らないものを発見することはできず、したがって探究の義務もない」ではない。それゆえ、想起説は探究可能性と発見可能性の両者を等しく担保するものであると考えられる。

以上の本稿の反論のうち、少なくとも(1)と(3)への反論については、Scottは次のように再反論を行うことができるだろう。(1)への反論の際に提示された引用箇所では、最終的に知識を獲得することが想起であると述べられている。これは、想起説が発見と成功した探究の問題に関心を持っていることの証である¹⁹⁾。それゆえ、想起説をプロセスとして解する必要はなく、やはりソクラテスは、単なる探究ではなく成功した探究に関心を持っているのである。

しかし、以上のような想定上のScottの主張は、本稿の反論に回答できていない。というのも、たしかに想起は最終的には知識の獲得を目指すので、結果として、発見と成功した探究に関係することは事実である。しかし、Scottの解釈は、想起がプロセスであるという解釈を排除しない。実際に、ソクラテスが「自分で自分の中に知識をふたたび把握し直すということが、想起することなのではないだろうか」と言うとき、「知識を把握し直す」という言葉にはその知識を獲得するためのプロセスも含まれている。なぜなら、ソクラテスの想起についてのそのその見解は、「探究と学習は実は全体として想起である」(81d4-5)ということであり、このテキストはそれ自体が解釈上の問題を持つとはいえ(特に「全体として」という言葉については多くの異なる解釈が存在する)²⁰⁾、少なくとも、探究が想起にとって重要な構成要素であることに疑いの余地はないからである²¹⁾。先述のように、想起の実演は探究プロセスを持つものとしての想起説を示している。

また、少なくとも『メノン』の中では、Scottの言うところの「成功した探究」の実例が挙げられていないことも重要である。想起の実演において達成されたのは真なる思いなしの把握にすぎず、この繰り返しによる知識の獲得は示唆されているにとどまる。ソクラテスとメノンの対話も同様で、徳の教授可能性どころか、その「何であるか」についてさえ結論は出ない²²⁾。

以上より、本稿は次のように主張する。まず、Scottが「メノンのパラドクス」をメノンの挑戦と争

論的ジレンマに区別したことは、このパラドクスの内部構造を明確化する点で意義があった。しかし、彼の主張とは異なり、これら両者を切り離して考察すべきではない²³⁾。というのも、探究の問題と発見の問題は、後者が前者に依存するという点で不可分であり、両者を切り離して考察することはできないからである。そして、それゆえ想起説は、Scottの解釈とは対照的に、探究と発見の問題の両者を含む「メノンのパラドクス」へと応答するものとして捉えられるべきである²⁴⁾。

おわりに

ソクラテスの対話相手であるメノンは、そもそも教育について歪んだ考え方を持っていた。それは、「教育とは、教える者による学ぶ者への知識の伝達(transmission)である」というものである²⁵⁾。このメノンの思想は、『メノン』篇の中で何度も示唆されるように、彼が教えを受けたゴルギアスの影響を強く受けている。彼はこのような学習観あるいは知識観を持っていたからこそ、「徳は教えられうるかどうか」ということや、「徳の何であるか」さえも知らないことをソクラテスから打ち明けられたとき、彼と対話を続ける意欲をなくしてしまったのである。そこでメノンが提出したのが、おそらくは対話を打ち切ることを目的にした「メノンのパラドクス」であった。

ソクラテスはメノンと対話を続けるために、メノンのパラドクスへの応答を試みる。この応答のために用いられたのが、Scottの解釈とは異なり、想起説と呼ばれるものなのである。ソクラテスは召使いの想起を(途中までとはいえ)実演することで、学習というのが想起にほかならず、想起とはある程度の幅を持つプロセスであることを示した。これは、想起ないし学習と探究が切り離すことのできないものであることを含意するだろう。それゆえ、ソクラテスはメノンのパラドクスへ想起説を用いて応答することによって、メノンの考えていた安易な学習観ならびに知識観の誤りを正すことも意図しているように思われる²⁶⁾。すなわち、ソクラテスはこの段階ですでに、「徳は教えられうるかどうか」というメノンの問いに、明言はしないが(少なくとも知識の伝達という仕方では教えることはできないという意味で)「否」と答えている。

しかし、メノンはこのようなソクラテスの暗黙の意図に気づかない。想起説についての「なぜかは知りませんが、たしかになるほどと思わせるものがあるよ

うです」(86b5)という彼の感想は、その無理解を端的に示しているだろう。実際に、メノンはそのすぐ後で、徳が教えられうるかどうかを再度ソクラテスに尋ねてしまうのである(86c7-d2)。たしかにソクラテスはこのメノンの言葉を受け、仮設法を用いることで徳が教えられうるかどうかを検討することを提案する(86e2-4)。本稿では仮設法そのものの意義を検討することはできないが、おそらくここでは、徳の教示可能性そのものよりも、その検討を通じた徳の本性そのものに関わる考察がより大きなウェイトを占めているように思われる²⁷⁾。

いずれにせよ、本稿は次のように結論する。想起説はメノンのパラドクスへ応答することで探究可能性を担保し、かつ、その重要な構成要素として探究を含むものである。そして、通常「学習」と呼ばれているものは想起に他ならないため、教育や学習の成立には知識の伝達ではなく探究こそが重要な役割を果たす。それゆえ、想起説は探究可能性を確保することによって、徳の教授可能性を間接的に否定することを目指すものである。

本稿は『メノン』篇におけるメノンのパラドクスと想起説の検討を通じて、プラトンの教育思想の一端を明らかにした。

しかし、そもそもなぜScottは想起説をメノンのパラドクスへの応答として捉えない可能性を示そうとしたのか。それはおそらく、彼の解する『メノン』の知識論あるいは認識論に関わる。Scottはソクラテスが発見について語る時、「先行認識原理(*foreknowledge principle*)」を奉じていることを強調する。すなわち、何かを発見したと言うためには、その発見したものが以前から持っている知識と同一のものであることが述べられなければならない²⁸⁾。それゆえ、Scottは想起説が潜在的な生得的知識(*latent innate knowledge*)を必要とすると考えている²⁹⁾。想起説の内実をこのように捉えることで、本稿で参照したような、探究可能性ではなく発見の問題への応答としての想起説という解釈が生じる。他方、Fineはソクラテスが先行認識原理を奉じていないことを示したうえで、想起説が要求するのは生得的知識ではなく生前の知識(*prenatal knowledge*)であると主張する³⁰⁾。

以上から理解されるように、想起と知識の問題を切り離して考えることはできない。今後は、本稿の考察を基盤として、想起説に知識論の観点から切り込んでいくことを目指したい³¹⁾。

註

- 1) Robson and Sparshott (1979: 422).
- 2) Cf. 片山 (1999), 佐藤 (2015: 35-52). また、『メノン』におけるソクラテスの「教育法」やその現代の適用などのより広い問題についても、Brickhouse and Smith (2009) が教育哲学的な考察を展開している。
- 3) プラトンの著作からの引用と参照について、ステファヌス版のページ数、段落番号、行数を指示する。引用の際には藤澤 (1974) を参照したが、OCT版を底本として訳文や訳語を断りなく変更した箇所も多い。また、() は原語を、[] は筆者による補足ないし説明を示す。以下同様。
- 4) プースは古代ギリシアの長さの単位であり、1 プースが1 フィート (約31cm) である。
- 5) Fine (2014: 75) に従い、「あるいは」ではなく「そして」と訳す。Cf. Sharples (1985: 63), Day (1994: 47), Bronstein (2016: 11).
- 6) Scott (2006: 75). また、この「メノンのパラドクス」というラベルについての議論を整理したものとして、Fine (2014: 25-27) を参照。
- 7) 以下の (S¹) - (S⁴) については、Scott (2006: 78) の定式をそのまま訳出した。
- 8) Fine (2014) や本稿と異なり、Scott (2006: 76) はこれを「あるいは (or)」と訳すことで、メノンが発見についての新たな問題を提示していると解する。Cf. Sedley and Long (2011: 14).
- 9) Scott (2006: 76-79).
- 10) Scott (2006: 79).
- 11) 以下では、Scott (2006: 79-82) において展開される3つの理由について、それぞれを要約したうえで(1) - (3) とナンバリングした。
- 12) Scott (2006: 82).
- 13) Scott (2006: 83-84, 117). また、Scott (1995: 24-32) やWeiss (2001: 53-54) も参照。
- 14) “Recollection is an account of where our cognitive states come from, and as such is not necessary to the solution.” (Scott (2006: 80)).
- 15) Cf. Bluck (1961: 288), Sharples (1985: 149).
- 16) Scott (2006: 83) は (M²) が (M¹) からすぐに導かれると主張しており、探究可能性と発見可能性の繋がりに気づいている。ただし、彼がこのように主張するのは、両者が密接にむすびついているがゆえに、知識と真なる思いなしの区別という戦略が (M¹) と同じく (M²) にも適用されるこ

とができるということを確認化するためであり、(M²) の (M¹) への依存という事態を主張したいわけではない。ここで、『メノン』の想起説についての、我が国の2人の碩学の意見を参照しておくことは有益であろう。松永 (1975: 429) は、「[想起説は] まさに探究するという行為自体の可能性を、根拠づけるためのひとつの説として提出されたものであった……そしてその途において、いわゆる正しい思いなし (オルテ・ドクサ) が知識 (エピステーメー) に転移しうる可能性が考えられたのであった」と述べ、また藤澤 (1974: 378) は「本篇『メノン』篇』における想起説の導入は、いわばまだ試験的な段階にとどまり、その目的と視野も制限されているといえるであろう。[……] 目的は差当りこの説によって、探究への意欲を鼓舞することにあつた」と述べる ([内は筆者が補った)。両者とも、想起説に関係するものとして、発見ではなく探究を (しかも成功した探究ではなくおそらくは探究一般を) 重視する。また、納富 (2019: 293-294) も参照。

- 17) Scott (2006: 82) は *ἂ μὴ ἐπιστάμεθα μηδὲ δυνατόν εἶναι εὔρεῖν μηδὲ δεῖν ζητεῖν* (86b9-c1) を “we cannot discover what we do not know and so have no duty to inquire” (下線は本稿による) と訳している。
- 18) Smyth (1956: 661) によれば、*οὐδὲ ... οὐδέ* は “not even ... nor yet” を意味する (*οὐ*と*μή*は、前者が「事実や言明の否定」を、後者が「意志や思考の否定」を示すなどの点で違いがあるが (Smyth (1956: 608)), さしあたりは両者とも否定辞として同じ意味合いを持つと考えて差し支えない (*οὐδέ*や*μηδὲ*などの合成語も事情は同じ))。
- 19) Scott (2006: 105-106).
- 20) 片山 (1999: 79-81) がこの問題のサーベイを行っている。
- 21) Fine (2014: 107). また、81d4-5における探究と想起の関係については、特に大草 (2009) を参照。
- 22) Scott が発見と成功した探究を同一視していることを踏まえれば、Fine (2014: 80, n. 31) のように、メノンが言及するのは「たまたまそれに出くわしたものを発見することだけであり、プラトン自身は成功した探究を意図していない可能性があることを指摘しておくことは重要であろう。
- 23) Fine (2014: 80) は80d5-8を、

(M¹) おや、ソクラテス、いったいあなたは、それが何であるかをまったく知らないものをいかなる仕方でも探究するつもりですか。

(M²) というのも、知らないものの中のいかなるものを、目標として立てたうえで探究しようというのでしょうか。

(M³) そして、実際にたまたまそれに出くわしたとしても、それが知らなかったものであるということがどうしてわかるのでしょうか。

と区別し、(M¹) と (M³) の問いかけが (M²) によって同時に動機づけられていると主張する。

- 24) 本稿と異なる理由から同じ結論を提出しているものとして、Fine (2014: 171) を参照。
- 25) Scott (2006: 13). Cf. 渡辺 (2012: 202, 213-214).
- 26) 『メノン』における想起と学習の強い関係性については、加藤 (1988: 191-210) を参照。
- 27) たとえば、渡辺 (2012: 228-253) を参照。
- 28) Scott (2006: 84-85).
- 29) このような表記を行うのはBronstein (2016: 14) である。自身はこの言葉を使用していないが、Scott (2006: 108-112) はFine (1992: 213, 223-224, n. 40) の批判に反論して、85d 9の「その召使いが今持っている知識」を潜在的な知識であると主張する。この召使いが生まれた後にどこかのタイミングで知識を獲得したことは否定されているわけであるから、その潜在的な知識は生得的なものでもであるとScottは考えているだろう。
- 30) Fine (2014: 168-172).
- 31) 本稿執筆にあたり、松浦和也氏 (東洋大学) のコメントによって様々な誤りを正すことができた。ここに謝意を表す。無論、残る誤りの責はすべて筆者にある。

参考文献

- Bluck, R. S. (1961) *Plato's Meno*, Cambridge University Press.
- Bronstein, D. (2016) *Aristotle on Knowledge and Learning: The Posterior Analytics*, Oxford University Press.
- Brickhouse, T. C. and N. D. Smith (2009) 'Socratic Teaching and Socratic Method', in H. Siegel ed. *The Oxford Handbook of Philosophy of Education*, Oxford University Press, pp. 177-194.
- Burnet, J. ed. (1903) *Platonis Opera*, vol. 3, Oxford

- University Press.
- Day, J. M. ed. (1994) *Plato's Meno in Focus*,
Routledge.
- Fine, G. (1992) 'Inquiry in the Meno', in R. Kraut ed.
The Cambridge Companion to Plato, Cambridge
University Press, pp. 200-226.
- (2014) *The Possibility of Inquiry: Meno's
Paradox from Socrates to Sextus*, Oxford University
Press.
- 藤澤令夫訳注 (1974) 『メノン』, プラトン全集第9巻,
岩波書店.
- 片山勝茂 (1999) 「想起としての探究と学習——『メ
ノン』における想起説の再検討」, 『教育哲学研究』
79, pp. 75-92.
- 加藤信朗 (1988) 『初期プラトン哲学』, 東京大学出版
会.
- 松永雄二訳註 (1975) 『パイドン——魂について』, プ
ラトン全集第1巻, 岩波書店.
- 納富信留訳註 (2019) 『パイドン——魂について』, 光
文社.
- 大草輝政 (2009) 「探求することと想起すること——
『メノン』81-86を中心に」, 日本西洋古典学会『西
洋古典学研究』57, pp. 53-64.
- Robson, J. M. and F. E. Sparshott (1979) *Essays on
Philosophy and the Classics by John Stuart Mill*,
The Collected Works of John Stuart Mill vol. xi,
University of Toronto Press.
- 佐藤邦政 (2015) 「教えと学びの認識論——理知的な
探求者となるための条件についての認識論的考察」,
日本大学博士論文.
- Scott, D. (1995) *Recollection and Experience: Plato's
Theory of Learning and its Successors*, Cambridge
University Press.
- (2006) *Plato's Meno*, Cambridge University
Press.
- Sedley, D. & A. Long (2011) *Plato Meno and Phaedo*,
Cambridge University Press.
- Sharples, R. W. (1985) *Plato: Meno*, Aris & Phillips.
- Smyth, H. W. (1956) *Greek Grammar*, Harvard
University Press.
- 渡辺邦夫訳註 (2012) 『メノン——徳について』, 光文
社.
- Weiss, R. (2001) *Virtue in the Cave: Moral Inquiry in
Plato's Meno*, Oxford University Press.

(本研究は2019年度環太平洋大学学内特別研究費「非
認知能力をベースとした幼小連携カリキュラム開
発——「哲学対話」という手法に着目して」の助成を
受けたものである)